



アタッチメント・スタイルの変容を促す介入の検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸田, まり, 田邊, 帆乃香, 村上, 葉月, 岩上, 悠斗 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007012

アタッチメント・スタイルの変容を促す介入の検討

戸田 まり・田邊帆乃香・村上 葉月・岩上 悠斗

北海道教育大学札幌校発達心理学研究室

Intervention Study of Attachment Style

TODA Mari, TANABE Honoka, MURAKAMI Hazuki and IWAGAMI Yuto

Department of Developmental Psychology, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

概 要

不安定な愛着の世代間伝達に対する介入の基礎的研究として、数日間の簡単な実験的介入によって成人のアタッチメント・スタイルが変容可能かについて検討を行った。36名の大学生に対し、PCおよびスマートフォンで利用可能なアプリケーションを用いてポジティブな出来事の報告を求め、それに対してポジティブ・フィードバックを行うという介入を5日間実施した。全体として見ると事前事後に測定したアタッチメント・スタイルの安定得点はこの介入によって有意に上昇することが示された。回避およびアンビバレント得点については変化が認められなかった。この変化は当初の自尊感情が中央値より高かった群にのみ認められた。当初の自尊感情が低かった群では、自尊感情自体は有意に上昇したが安定得点の上昇には至らなかった。簡易な介入によるアタッチメント・スタイル変容の可能性と、自尊感情との関連について考察した。

問題と目的

アタッチメント・スタイルとは

アタッチメント（愛着）とは人が身近な他者との結びつきを希求することであり、Bowlby（1969, 1973, 1980）により提唱された。人間が危機的と感じる状況において特定の対象に近づき自分が安全だという感覚を得ようとする行動システムを指す（戸田, 2013）。アタッチメントは人にとって生得的なシステムと考えられており、乳幼児は安全感を得るために身近な、多くの場合は

母親などの養育者に対し選択的に近接を求める。養育者がそれに対し適切に応じる、あるいはうまく応じられないことで乳児は自分が安全だ、もしくは安全でないという感覚を得、そうした経験が積み重なって対人関係全般に関する表象モデルである内的作業モデルを作り上げると考えられている。内的作業モデルは愛着対象（他者）に関する心的表象であるとともに自己に対する心的表象でもある。そして生涯にわたりその個人の対人関係を方向づけるものとなる。

こうした個人の対人関係についての内的表象で

ある内的作業モデルが行動として顕在化したものをアタッチメント・スタイルと呼ぶ。アタッチメント・スタイルは次に述べるように3つ、あるいは4つに分類されることが多い。

アタッチメント・スタイルの分類

乳児がどのようなアタッチメントを形成しているかを最初に明らかにしたのはAinsworthとその共同研究者（Ainsworth, Blehar, Waters & Wall, 1978）たちである。アタッチメントは危機に際して発動する行動システムであるため、乳児に知らない場所で親と離れる等の軽度なストレスを与え、その後アタッチメント対象である親をどの程度どのように求めるかでその安定性を捉えようとした。この方法がストレンジ・シチュエーション法である。

この中で、ストレスフルな状況を経験しても養育者と再会した後はスムーズになだまることができる場合は「安定型」とされた。これは他者（養育者）は応答的であり、自分は援助される価値がある存在であるという表象が形成されているためと考えられる。そうではなく、不安が強く分離して再会した時に自分から離れていったことへの怒りや強い接近・接触要求行動を見せ、なかなかだまることができない場合は「アンビバレント型」とされた。愛着対象に対して信頼と不信の二律背反的（アンビバレント）な表象を持つと考えられている。再会時にむしろ親を避けるような行動を見せた場合が「回避型」である。ストレスの高い事態であっても愛着対象との関わりを避けるタイプで、他者からは援助を期待出来ないという表象を形成しているからではないかと考えられる。後に個々の行動がバラバラで組織だっていない「無秩序型」が加えられたが（Main & Solomon, 1990）、こうした行動を示す子どもには被虐待児など養育環境の中で不適切な体験をしてきた者が比較的多いことが報告されている（Lyons-Ruth & Jacobvitz, 1999）。

乳幼児ではなく、成人のアタッチメント・スタイルを測定する方法としては大きく成人愛着面接（Hesse, 1999）と質問紙法（Hazan & Shaver,

1987; Bartholomew & Horowitz, 1991）が挙げられる。いずれもAinsworth et al. (1978) の乳幼児についての分類と同様の類型が考えられており、自己観も他者観もポジティブな安定型、見捨てられ不安が強くアンビバレントなとらわれ型、親密な関係を回避する傾向が高い拒絶型などに分類されている。アタッチメント・スタイルを安定と不安定に二分する場合は、アンビバレントと回避をまとめて不安定群と考えている。

世代間連鎖の懸念

アタッチメント・スタイルを成人について適用した研究は数多い（Rholes & Simpson, 2004）。特に親が不安定なアタッチメント・スタイルを持っている場合に子どもに対して望ましくない影響を及ぼすことがあるのではないかと懸念されている。親のアタッチメント・スタイルが不安定であると乳児の泣きや後追いなどのシグナルに対して敏感かつ適切に応答することが難しく、そのことで子どものアタッチメント・スタイルが不安定になるという連鎖の可能性が考えられるからである。アタッチメント・スタイルの世代間連鎖は外国でも日本のデータでも様々な研究方法である程度認められており（Fonagy, Steele & Steele, 1991；数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000；金政, 2007など）、親のアタッチメント・スタイルが不安定であることが発達障がいを持つ子どもの自尊感情を低下させることも示されている（岩崎・井上・山崎, 2021）。

アタッチメント・スタイルの変容

このように成人が不安定なアタッチメント・スタイルを持っている場合、その不安定さは悪循環的に次の世代へと連鎖する可能性がある。ではアタッチメント・スタイルはいったん形成されたら変容しないのだろうか。特に成人のアタッチメント・スタイルはどの程度変容の可能性があるのだろうか。

主として中年期を対象に4年間の縦断研究を行ったKirkpatrick & Hazan (1994) では、約半数がアタッチメント・スタイルを変化させていた。大学生を対象にした児童期を回顧する研究で

も約半数に変化があることが示されている（内田，2014）。

12ヶ月時点でストレンジ・シチュエーション法によってアタッチメント・スタイルを測定し、同じ人を20年後に再び成人愛着面接で調べた縦断研究では、64%が乳児期と同様の類型に分類された（Waters, Merrick, Treboux, Crowell & Albersheim, 2000）。この研究では、親を失うこと、親や子自身の命に関わるような病気や、家族からの虐待など、成人するまでの間のネガティブな出来事が、乳児期に安定していたアタッチメント・スタイルを20歳時点で不安定にさせる要因であることを見いだしている。

これらから概ね半数程度はアタッチメント・スタイルが人生のどこかの時期で変容することが推測される。不安定さへ変容するきっかけとして Waters et al. (2000) はネガティブな出来事を挙げているが、ではポジティブな出来事があれば安定性は増すのだろうか。不安定なアタッチメント・スタイルは他者や自己に対して信頼できない、しきれないという内的作業モデルが反映されたものと考えられる。その部分に働きかけて安定側にシフトするような介入は考えられないのだろうか。

そうした試みは多くないが一部検討されている。たとえば Navarro-Gil, Lopez-del-Hoyo, Modrego-Alarcón, Montero-Marin, & Van Gordon, Shonin & Garcia-Campayo (2020) はアタッチメントを基盤としたコンパッション（同情、思いやり）療法（ABCT: Attachment-Based Compassion Therapy）を使用し、8回のセッションを通して、Bartholomew & Horowitz (1991) で測定した成人の不安定および回避的なアタッチメント得点の有意な低減を導いた。また Arriaga, Kumashiro, Simpson & Overall (2018) はアタッチメントセキュリティ強化モデル（ASEM）を提唱し、そのモデルを用いた介入で個人のアタッチメントの不安定性を低下させている（古村・戸田，2020）。

しかしこれらの介入は実施者・指導者に専門的な知識が必要であり、労力や時間などのコストも

高い。一般の教師や保育士、医療や福祉関係者、あるいは家族や友人などが日常的にできる方法ではないと考えられる。

安定性と関連する要因と介入の可能性

アタッチメントの安定性・不安定性と関連のある要因としては、個人の精神的健康、自尊感情や主観的ウェルビーイングなどが見いだされている（今野・吉川，2017；小寺・桂田，2020）。特に自尊感情は安定とは正の、アンビバレントとは負の関連があると指摘されている（豊田，2014）。一般にアタッチメント・スタイルと自尊感情に強い関連があるのであれば、自尊感情に働きかけることで間接的にアタッチメント・スタイルを不安定から安定した方向に導くことも可能なのではないだろうか。

自尊感情の向上を目的とした働きかけには多くの実践がある。たとえば松久（2012）は大学生の実験群および統制群に対し1セット30分のリフレーミングに関する集団プログラムを4セット行い、介入前後で自尊感情が上昇することを見いだした。学校で複数回の授業の中でソーシャルスキルトレーニング等を介して児童生徒の自尊感情の向上をめざそうとする試みも多い。しかしこれらもまた、実施にあたってそれなりの専門的な知識や技能、ある程度の時間が必要とされる方法である。

こうした具体的なプログラムでなくても、他者からポジティブな評価を受けることで自己評価が大きく変容するのは日常経験するところである。自尊感情など自己についての感覚は周囲の人々との関係性の状態を反映したものとして捉えられる（遠藤，1999）が、それにならえば他者からの良い評価や、自分ではそうでないと思っていることに対して良い方向からの新たな視点を提示することは、一種のリフレーミングとなり自尊感情を動かす要因となり得るのではないだろうか。

以上より本研究では、日常的な良い出来事の自覚と、それに対する他者からのポジティブ・フィードバックが、

①自尊感情を向上させる

②個人の持つアタッチメント・スタイルの安定性を上昇させる

③不安定性を抑制する方向に変容させる

のではないかと考え、実験的介入を行ってこれを検討することとする。

方法

研究協力者

協力者は大学生1～4年生計37名で、うち回答に欠損のなかった36名（男性14名、女性22名）を分析の対象とした。協力者の年齢は18歳から24歳まで分布し、全体の平均年齢は20.9歳（SD=1.2）であった。

手続き

1. 研究全体の流れ

本研究は図1に示すように、調査1、実験、調査2の3つの部分から成る。まず調査1で研究開始時点でのアタッチメント・スタイルおよび自尊感情をたずねる。その後、スマートフォン等を用いて連続する5日間、協力者と実験者の間でやりとりを行う。この5日間の介入実験が終わった後に、調査2として再びアタッチメント・スタイルと自尊感情をたずね、研究を終了する。

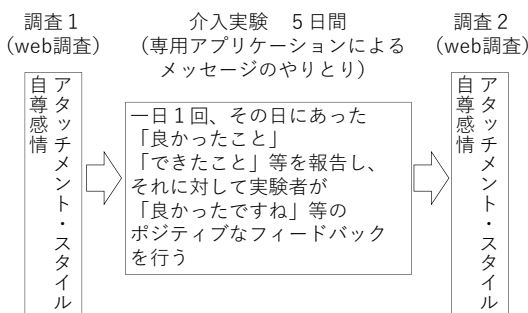


図1 研究全体の流れ

2. 協力者の募集

第2～第4著者が所属する大学生のLINEグループに協力依頼の文面を投稿し、協力を求めた。協力の意志を示した者に対し、「実験の説明書」を送付した。内容は、

①研究の詳しい内容と全体の流れ(図1の内容)

②研究の際に使用するアプリケーションとそのインストール方法およびアカウント登録方法である。

協力者がこの概要を読み、記載したアプリケーションへのアカウント登録をすることで研究協力を同意したものとみなし、以降のやりとりを行った。1で述べたように、本研究は調査1、アプリケーションを使った介入実験、調査2の、3段階の流れとなっており、協力の意志が変わった場合、どこで参加意志を撤回しても不利益は生じない旨を説明した。また協力者には「調査1、介入実験、調査2を通して同じであるなら、仮名で登録してかまわない」旨を連絡し、本名でなくても自由に自分の名前を変更し、匿名の状態に参加できることを伝えた。

この「実験の説明書」に従い、記載した通りアプリケーションにアカウント登録した場合に実験に同意したものとみなし、以降のやりとりを行った。

3. 調査1および2の内容

調査1および調査2はGoogle Formsを使用し、オンラインで行った。質問内容は以下の通りである。

・アタッチメント・スタイル 戸田(1988/2001)の内的作業モデル尺度を使用した。本尺度はHazan&Shaver(1987)をもとにした詫摩・戸田(1988)を改訂したものであり、安定、アンビバレント、回避の3つの下位尺度から成る。安定尺度は「気軽に頼ったり頼られたりすることができる」、アンビバレント尺度は「人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある」、回避尺度は「人に頼るのは好きではない」等の項目から構成され、これらを含む計18項目について原典に基づき6段階評定で尋ねた。

・自尊感情 山本・松井・山成(1982)を用いた。Rosenberg(1965)の翻訳バージョンとして多くの研究で使用されている自尊感情を測定するための尺度で、「少なくとも人並みには、価値のある人間である」等の10項目から成り、5段階評

定を求めた。

なお、調査1、2とも、Google Forms上でも改めて実験への参加が自由であることを説明し、回答することへの同意を求め、同意した者だけが回答できる様式とした。調査1は介入実験を行う前に、調査2は介入実験が終わった後、すみやかに実施した。

4. 介入実験の準備と内容

5日間の介入実験は、実験者と協力者個人々人との間の1対1のメッセージのやりとりとして行われた。概要を図2に示す。

実験者は登録した協力者の個人アカウントに対し、5日間、毎日「今日はどんな良いことがありましたか」と送信し、その日にあった良かったこと、できたこと等を返答するよう求めた。協力者がそれに対し返答すると、翌日に実験者はそのことについて「〇〇ができてよかったですね」等のポジティブなフィードバックを行った。この手続きを5日間、繰り返して行い、実験部分は終了した(図3参照)。

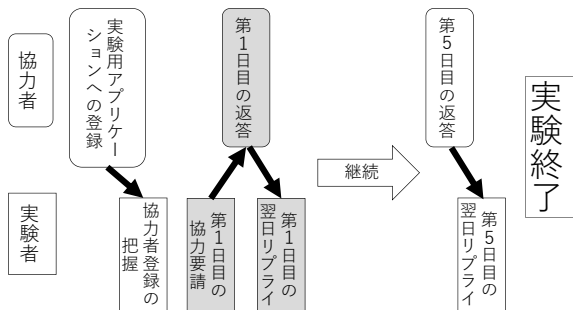


図2 介入実験部分の流れ(灰色部の詳細を図3に示す)

参加者とのやりとりにはLINE WORKSのアプリケーションを使用した。LINE WORKSは、日常使用している人が多いアプリケーション「LINE」と同系列会社であるワークスモバイルジャパン株式会社が提供する企業向けのクラウド型ビジネスチャットツールである。スマートフォンやパソコンに対応しており、多くの学生が使用するLINEと同様のメッセージのやりとりが可能であること、無料で使用できること、協力者は新たに実験用アカウントを取得することにはなるが

日常利用している個人の私的なLINEと混同されないことから、実験に使用することとした。実験者がホスト(会社)となり、協力者はそのメンバー(社員)としてアカウントを登録し、実験のみに使用した。

5. 予備実験

介入実験に先立ち、第1～第4著者の計4名で2020年10月29日から2020年11月4日の期間で予備実験を行った。第2～第4著者が交代で「実験者」役割をとり、2日ずつ計6日間の予備実験を行った。「実験者」役割の者は毎日協力要請を送信し、残りの「協力者」役割となった者が自由に返答した。ここではリプライの内容および分量と言葉遣い、協力要請を行う時間帯、協力者になった場合にとまどいやすい事柄などが検討された。この予備実験の結果から、すべてのリプライは、「〇〇で良かった」という報告内容の肯定と、「〇〇に気づくことができる××さんはさすがですね」「たくさん良かったことを発見できる××さんは素敵ですね」等の協力者自身を肯定する部分を含むようにした。また自分が報告した「良かったこと」に対し第三者から肯定的なリプライがあることで、全員が前向きな、もしくは嬉しい気持ちを感じることができ、想定したリプライ文で不快な感情を持つことはない判断されたため、本研究を実施することとした。

6. 介入実験の流れ

介入実験では、第2～第4著者が交代で実験者(「前向き太郎」という名で登録)をつとめた。毎夜の決まった時間に各協力者に「今日あった良かったこと、できたこと等を教えて下さい」との連絡をした。それに応じて参加者はそれぞれ個別に良かったこと等を実験者に送信した。それに対し実験者は翌日の朝、リプライを行った。送ってもらった「良かったこと」に対し、どのような内容でも実験者は肯定的なリプライをした。リプライの言葉遣いや分量は各回で大きく変わらないようあらかじめいくつかのパターンを予備実験の結果から作成し、協力者の回答内容に沿ってフィードバックするようにした。やりとりは1人につき

計5日間実施した。予備実験でのやりとり例を図3に示す。Aは実験者（前向き太郎）であり、Dは協力者役割をとった者である。図3右側の実験者からの翌日のリプライは、ほぼこの程度の分量と内容ですべて行った。

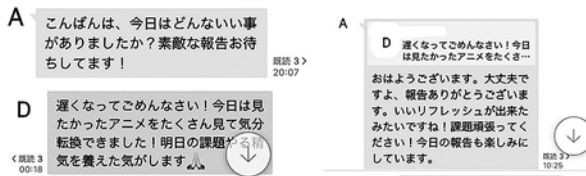


図3 予備実験時のやりとり例(図2の灰色部分の例)

研究時期

2020年11月22日～2020年12月24日の間で実施した。

結果

1. 尺度の確認と整理

使用した尺度類については内的一貫性を確認するため、それぞれを構成する項目を用いて主成分分析を行った。その結果、内的作業モデルの3つの下位尺度、および自尊感情尺度ともに、含まれる項目はおおむね第一主成分に.5以上の負荷を示し、寄与率は介入前回避を除き、おおむね50から60%であった。各尺度について信頼性係数を求めたところ、それぞれ安定（介入前：0.84, 介入後：0.87）、アンビバレント（介入前：0.79, 介入後：0.85）、回避（介入前：0.58, 介入後：0.71）、自尊感情（介入前：0.88, 介入後：0.84）であり、介入前の回避尺度を除くすべての尺度で.7～.8の高い信頼性が得られた。回避尺度については原論文でも内的一貫性が他に比べてやや低いことが指摘されているが（戸田, 1988/2001）、介入後については.71を示しており、今回はそのまま使用することとした。

各尺度は、含まれるすべての項目合計を項目数で除した数値を得点とした。平均と標準偏差(SD)は表1に示す。安定、アンビバレント、回避の3尺度は1点から6点まで分布し理論上の中央値は

3.5点、得点が高い方がその尺度内容を強く表す。安定得点は平均が中央値以上であるが、アンビバレント得点は平均が中央値よりわずかに低い。回避得点は低い側に偏っていた。自尊感情は1点から5点まで分布し理論上の中央値は3点、得点が高い方が自尊感情が高いことを表す。平均得点は中央値よりやや高めであった。

これらの尺度について性別による差異は見られなかった。よって以降は全体を込みにして分析を行った。

2. 介入実験による各尺度の変動

5日間の介入実験で内的作業モデルに変容が見られたかどうかを調べるため、介入前後の各尺度得点について対応のあるt検定を行った。結果を表1および図4、図5に示す。

表1 各尺度の介入前後の平均 (SD)

	介入前	介入後	t	d.f.	p
安定	3.79(.92)	3.97(.98)	-2.39	35	0.023
アンビバレント	3.28(.87)	3.25(.96)	0.39	35	n.s.
回避	2.66(.72)	2.71(.80)	-0.66	35	n.s.
自尊感情	3.21(.77)	3.36(.72)	-2.53	35	0.016

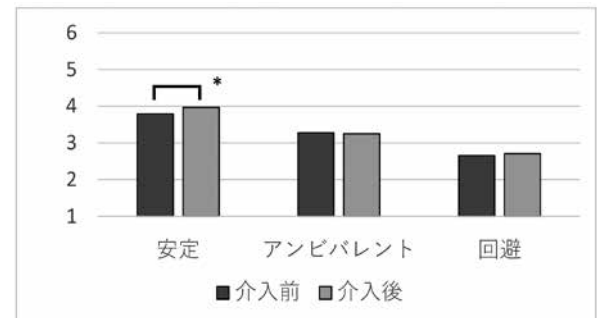


図4 全体での安定、アンビバレント、回避得点の介入前後の比較 (*: p<.05)

安定尺度得点は介入実験を挟んで5%水準で上昇が見られた。アンビバレント、回避の両尺度得点については変化が認められなかった。自尊感情得点は5%水準で上昇することが示された。

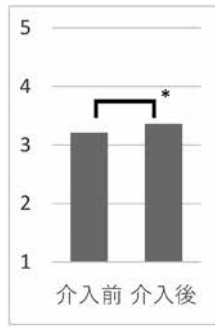


図5 自尊感情の変化
(* : $p < .05$)

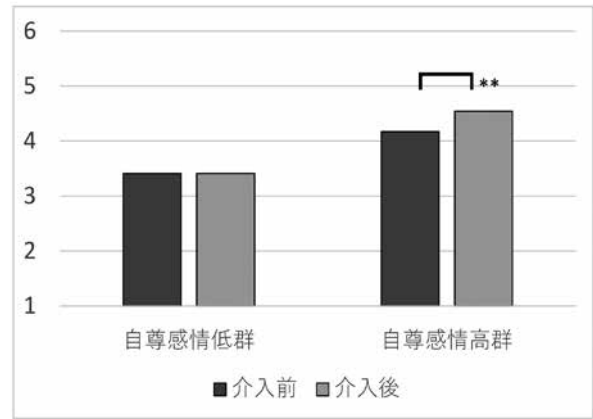


図6 介入前自尊感情の高低で分けた安定得点の比較
(** : $p < .01$)

3. 当初の自尊感情の高低による介入実験効果の差異

次に介入前から自尊感情が高かった者と低かった者では介入実験の効果が異なるかどうかを調べるため、介入前の自尊感情得点の中央値で協力者を2分し、アタッチメント・スタイルの各尺度に影響が見られるかどうかを検討した。結果を表2および図6に示す。

安定得点は、介入前の自尊感情が高かった群においてのみ有意差が見られた($t = -3.25$, $df = 17$, $p = 0.005$)。介入前の自尊感情が低かった群では、介入による変化は認められなかった。アンビバレントと回避については、どちらの群にも介入による効果が認められなかった。

表2 介入前自尊感情の高低で分けたアタッチメント・スタイル得点の比較

	介入前の自尊	N	介入前	介入後	t	d.f.	p
安定	自尊感情低群	18	3.41 (0.90)	3.41 (0.99)	0.00	17	n.s.
	自尊感情高群	18	4.17 (0.79)	4.54 (0.58)	-3.25	17	0.005
アンビバレント	自尊感情低群	18	3.87 (0.72)	3.76 (0.79)	0.79	17	n.s.
	自尊感情高群	18	2.69 (0.54)	2.73 (0.85)	-0.29	17	n.s.
回避	自尊感情低群	18	2.62 (0.68)	2.80 (0.79)	-1.37	17	n.s.
	自尊感情高群	18	2.69 (0.78)	2.64 (0.82)	0.34	17	n.s.

さらに介入前の自尊感情によって、自尊感情自体への影響が異なるかどうかを検討するため、同様の2群で介入前後の自尊感情得点を比較した。結果を表3および図7に示す。

表3 自尊感情自体の変化

	介入前の自尊	N	介入前	介入後	t	d.f.	p
自尊感情	自尊感情低群	18	2.56 (0.44)	2.84 (0.58)	-3.27	17	0.005
	自尊感情高群	18	3.87 (0.34)	3.88 (0.37)	-0.24	17	n.s.

図7に示すように、介入前の当初の自尊感情が低かった群（自尊感情Lo群）は、介入実験の後には有意に自尊感情が上昇することが示された。当初の自尊感情が高かった群（自尊感情Hi群）ではこのような変化は認められなかった。

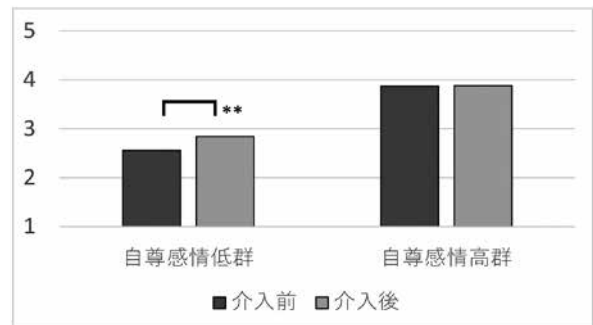


図7 介入前自尊感情の高低で分けた自尊感情自体の変化 (** : $p < .01$)

考 察

本研究では、アタッチメント・スタイルの安定性、不安定性が、簡易な他者からのポジティブ・フィードバックで変容し得るかについて検討を行った。

PCやスマートフォンでその日の「良かったこ

と」「できたこと」について報告を求め、それについて毎回、実験者が「良かったですね」等のポジティブなフィードバックを行った。こうした実験者とのメッセージのやりとりを5日間継続し、事前事後にアタッチメント・スタイルと自尊感情を測定したところ、このような簡易な介入によって自尊感情とアタッチメントの安定性が有意に高まることが示された。アンビバレントおよび回避については影響が認められなかった。よって仮説の①と②については検証されたが、③については棄却された。

ポジティブなフィードバックが自尊感情を向上させることはこれまでも示されており（眞築城・酒井・上長, 2014; 澤口・渋谷, 2015）、本研究でも確かめられた。本研究での特徴は、それが実際の家族や恋人、親友等ではなくインターネットを通じた実験者であったことだろう。協力者は実験者と面識のある者も含まれたが、リプライは実験者群（第2～4著者）を総合した「前向き太郎」という抽象的な存在から文字によるメッセージが送られたのみであった。協力者は毎日、その日に自分が体験したポジティブな出来事を想起して報告することが求められたが、このことが協力者の注意をポジティブ体験に向け、さらにそのポジティブ体験に対し他者からも肯定的なフィードバックを得ることで「自分はそうそうダメな人間ではない」という自尊感情が強められたのではないかと考えられる。この効果は当初の自尊感情が中央値より低かった群に認められた。これは本研究での自尊感情高群が当初から5段階評定の4に近い平均値を示しており、天井効果を生じた結果ではないかと推測される。

アタッチメント・スタイルの安定得点も介入によって上昇した。ただしこちらは当初の自尊感情が高かった群にのみ認められ、低かった群では有意ではなかった。自尊感情はアタッチメント・スタイルの安定得点と関連が強いことがわかっている。しかし介入効果が自尊感情高群にだけ認められたということは、当初の自尊感情によって介入の影響が異なることを示している。アタッチメン

ト・スタイルあるいは内的作業モデルの安定性を求める場合にある程度の高さの自尊感情がないと介入効果が認められないのか、それとも他に何かの要因が影響してこのような結果になったのかは今後さらに検討する必要がある。

本研究は不安定なアタッチメントの世代間連鎖を断ち切るために何ができるかという発想から考案された。良いことを想起し、それに対して一般的で簡易な肯定的フィードバックを短期間行うことで自他に対する安定的な内的作業モデルが強化されるとすれば教育や福祉の場での応用可能性も高いであろう。

むろん、本研究では質問紙でアタッチメント・スタイルを捉えており、個人が意識的に自覚した部分以上の影響については検討できていない。また短期間の介入であり長期的な効果については未知である。さらに研究協力者は大学生であり、人数も少ない。これらの点については今後の検討にゆだねられている。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Belhar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 Patterns of Attachment: A psychological study of the strange situation. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Arriaga, X.B., Kumashiro, M., Simpson, J.A., & Overall, N. C. 2018 Revising working models across time: Relationship Situations that Enhance Attachment Security. *Personality and Social Psychology Review*, 22, 71-96.
- Bartholomew & Horowitz, 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. 1969 Attachment and loss. Vol. 1. Attachment. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1973 Attachment and loss. Vol. 2. Separation: Anxiety and anger. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1980 Attachment and loss: Vol.3. Loss: Sadness and depression. New York: Basic Books.
- 遠藤由美 1999 「自尊感情」を関係性からとらえ直す。実験社会心理学研究, 39, 150-167.
- Fonagy, P., Steele, H., & Steele, M. 1991 Maternal

- representation of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, 62, 891-905.
- Hazan, C., & Shaver, P.H. 1987 Romantic love conceptualized and an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Hesse, E. 1999 The Adult Attachment Interview: Historical and Current Perspectives. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment: Theory, Research, and Clinical Applications*. New York: Guilford Press. Pp.395-433.
- 岩崎美奈子・井上祐紀・山崎知克 2021 保護者のアタッチメント・スタイルが注意欠如・多動症児の自尊感情に及ぼす影響について. *小児の精神と神経*, 60, 4, 325-335.
- 金政祐司 2007 青年・成人期の愛着スタイルの世代間伝達 ―愛着は繰り返されるのか―. *心理学研究*, 78, 398-406.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 2000日本人母子における愛着の世代間伝達. *教育心理学研究*, 48, 323-332.
- Kirkpatrick, L.A., & Hazan, C. 1994 Attachment Styles and Close Relationships: A four-year prospective study. *Personal Relationships*, 1 (2), 123-142.
- 小寺健太・桂田恵美子 2020 攻撃性と自尊感情および愛着スタイル. *関西学院大学心理科学研究*, 46, 103-109.
- 古村健太郎・戸田弘二 2020 助け合いとしてのアタッチメント. *心理学評論*, 63, 263-280.
- 今野義孝・吉川延代 2017 愛着スタイルと自尊感情との関連性：身体感覚への態度，マインドフルネス，反すう，レジリエンスの媒介効果. *人間科学研究*, 38, 137-148.
- Lyons-Ruth, K., & Jacobvitz, D. 1999 Attachment Disorganization: Unresolved Loss, Relational Violence, and Lapse in Behavioral and Attentional Strategies. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment: Theory, Research, and Clinical Applications*. New York: Guilford Press. Pp.520-554.
- 眞榮城和美・酒井彩子・上長然 2014 親子の相互作用に関する観察評定マニュアル日本語版の作成：親の評価的フィードバックと子どもの自尊感情の関連から. *清泉女学院大学人間学部研究紀要*, 11, 49-58.
- Main, M., & Solomon, J. 1990 Procedures for Identifying Infants as Disorganized/Disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In M.T. Greenberg, D. Cicchetti, & E.M. Cummings (Eds.), *Attachment in the Preschool Years*. Chicago: University of Chicago Press. Pp.121-160.
- 松久眞実 2012 自尊感情の向上を目的とした認知的側面への介入に関する実践的研究. *プール学院大学研究紀要*, 52, 119-132.
- Navarro-Gill, M., Lopez-del-Hoyo, Y., Modrego-Alarcón, M., Montero-Marin, J., Van Gordon, W., Shonin, E. & Garcia-Campayo, J. 2020 Effects of Attachment-Based Compassion Therapy (ABCT) on Self-compassion and Attachment Style in Healthy People. *Mindfulness*, 11, 51-62.
- Rholes, W.S., & Simpson, J.A. (Eds.) 2004 *Adult Attachment: Theory, Research, and Clinical Implications*. Guilford Press.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton: Princeton University Press.
- 澤口右京・渋谷昌三 2015 社会人の会社場面における「ほめ」経験と自尊感情，自己受容，対人特性の検討. *目白大学心理学研究*, 11, 73-81
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度―成人版愛着スタイル尺度作成の試み―. *人文学報*, 196, 1-16.
- 戸田弘二 1988/2001 内的作業モデル尺度. 吉田富士雄（編）*心理測定尺度集Ⅱ*. サイエンス社. Pp.109-114.
- 戸田弘二 2013 ボウルビイの愛着理論の貢献：過去・現在・未来. 日本発達心理学会（編）*発達科学ハンドブック1 発達心理学と隣接領域の理論・方法論*. 新曜社. Pp.43-55.
- 豊田弘司 2014 愛着スタイル，情動知能及び自尊感情の関係. *教育実践開発研究センター紀要*, 12, 1-6.
- Waters, E., Merrick, S., Treboux, D., Crowell, J., & Albersheim, L. 2000 Attachment Security in Infancy and Early Adulthood: A Twenty-Year Longitudinal Study. *Child Development*, 71, 684-689.
- 内田利広 2014 内的作業モデルの児童期から青年期における変容 ―重要な他者という観点から―. *京都教育大学紀要*, 125, 117-130.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面. *教育心理研究*, 30, 64-68.

謝 辞

本研究にご協力いただいた研究協力者の皆様に深く感謝いたします。

付 記

1. 本研究は北海道教育大学研究倫理委員会による承認

を得た（北教大研倫2020121001）。

2. 本研究は、令和2年度「心理学応用実験Ⅰ・Ⅱ」（担当教員は第一著者）として行われた研究（田邊帆乃香・村上葉月・岩上悠斗 2021 愛着スタイルの変容を促す介入の検討 未公刊）を再分析、再構成したものである。

（戸田 まり 札幌校教授）

（田邊帆乃香 札幌校学部学生）

（村上 葉月 札幌校学部学生）

（岩上 悠斗 札幌校学部学生）